

附セラレシト、其拾ヒシ書生ノ話セシ、コレハカヘスベキ主ナケレバ、宗廟へ納ルコ、ロナルベシ。

〔先哲叢談 繼編七〕服部梅圃

梅圃性敦厚而公正、不苟動止、直方以御于家、節儉以檢于躬、奉職循理、常以經術修飾吏務、饑遺菴苴、無一所受、壁間常揭百術不如一廉之語、以自警戒、

〔近世畸人傳三〕太田見良

猩々庵

太田見良、字資齋、伊豫大洲加藤侯の士也。○中侯の翁主官家に嫁し給ふに召れて、侍醫となる。養生の法をもて、玄ばく諫れども用られず、故に脚疾に托し、祿を辭して退く。此後永く家居し、樋を踏ざるは、此言を實にすとなり、自往すといへども、病客門に充て、醫療をこふ。學生も亦あまた従ふ。其清白の一事を、藥物において、極品を撰て、價をとふことなく、その言にいはく、もし時の價を玄れば、おのづから鄙客の意生じ、調劑の間、其價貴きものは、減するに至る。わが淺ましきをおもふがゆゑにつ、しみてとはすと。

〔續近世畸人傳二〕一祚梨一

一祚梨一は江戸の人也。性廉にして、家乏しく、書のみ多し、凡世の人事を省き、外の聞見をいとはず、隱操ある人なり。○中一時越前の兵庫といふ所の代官になり。○略秋收を聞ことありしが、其正直無欲なることを百姓大きに感じて、梨一明神と唱へて、其眞影を崇、秋ごとに祭れりとぞ。〔雲萍雜志〕浪華に紀伊國屋亦右衛門といへるは、大家の商人なりけるが、そのかみ年まだ若かりしこる。本家何がしにつかへ。○中一萬兩を十萬兩になさんこと、何の子細かさむらふべきとて、三とせも經ぬ間に、十萬兩に倍して來れば、主人その働きを感じて、その辛抱、この上は差圖すべきにもあらねど、この度は百萬兩にも倍すべくとあれば、亦右衛門こたへけるは、十萬兩のこ